

平成24年度第1回大村知事と語る会 意見交換要旨

1. 日時 平成24年7月16日（月・祝） 14：00～16：00
2. 場所 ウィルあいち（女性総合センター）
3. 参加者（五十音順・敬称略）
 - 犬飼将清（弥富建設株式会社代表取締役）
 - 大津たまみ（株式会社アクションパワー代表取締役）
 - 桑原かおり（雑誌メナージュケリー 編集長）
 - 小森美奈（「Brother Mothers'」主宰）
 - 丹羽 綾（整体師、骨盤美人体操講師 「自営ワーママ☆クラブ」代表）
 - 林美保子（ミッドランドスクエア広報マネージャー）
 - 飛鷹正範（「三河子育てパパネット」主宰）
 - 横井暢彦（有限会社ワッツビジョン代表取締役）

【林美保子】

今、ミッドランドスクエアのキャンペーンやイベントを企画している中で、名古屋のお客様のマーケティングをするとキャリア女性が名古屋は非常に少ないというデータが出てくる。家事手伝いの女性が多い。

大手の企業があり、その下請けや、孫請けの、小さいながらも社長令嬢というようなお嬢様がたくさんいらっしゃり、そのままお嬢様の流れで結婚され、主婦になられる方が多いのかというふうにも思う。

名古屋はどちらかというと保守的なエリアで、女性が働きづらい環境があるのかとも思う。

今の仕事をさせていただいている中で、やはりターゲットは女性。商品ターゲットが女性ということで、女性心理がわかるという意味で職場で重宝がられているのかなと感じることがある。やはり、女性が流通の分野などでスタッフの中に入っていると、的を射た企画というのができる可能性もあるので、もっともっと名古屋の女性が活躍される社会になると良いと思う。

【大津たまみ】

私は、シングルマザーになったと同時に、自営業の主人の仕事を手伝わせてもらっていたので、失業するという状況になった。最初は、どこかに勤めようと思って考えていたが、どこに面接に行っても断られるという経験してきた。

そのときによく言われていた言葉が2つあった。1つ目は、仕事に何かあったとき、子どもを預ける先はあるのということを言われた。あともう一つが、残業とか出張とかはできるのかと言われたが、遠方に両親も住んでいて、ワーキングマザーで働いている自分にとっては預ける先がなかった。そのため、子どもを育てているお母さんや、私と同じシングルマザーが生き生きと働くことができる会社をつくろう、自分の望む会社をつくろうと思った。

そんなとき、母子支援センターからの紹介で、公益財団法人のあいち産業振興機構の創業プラザあいちに行きそこで無料でプレゼンを聞いていただいたり、専門家の先生たちにふんだんにアドバイスがもらえた。意外と女性起業家というと、なかなか相談する先がなく困っていた。創業プラザあいちも、私が入居するまでの間というのは男性がすごく多かったというイメージがある。今はかなり女性が増えているが、そんな中でも友達を見つけては相談をし、事業を起こすことができた。

起業したが、生活と仕事のバランスがとれない。仕事を頑張れば子どもとの時間が少なくなるという状況にすぐに直面していった。頑張れば頑張るほどバランスがとれていなくなってきたので、子どもが小さい間は、日曜日は子どもの時間というのをつくって過ごしていた。

私は、当初から、自分が起業するときにそういう思いをしているので、一緒に働くメンバーを子育て中のママやシングルマザーを中心に集めている。その中で、子育て中のママやシングルマザーがもっと働きやすくて、そして、夢が持てる制度はないかなというふうを考えてフリーエージェントスタイルというのを導入したが、メイトシステムというのを導入した。

これは、一言で言えば、掃除や片づけ業界での独立を支援する、そういう働き方であるが、家事代行という分野は、女性が今までやってきたことにプロのわざをつければ起業ができる分野。なので、これはぴったりだというふうに思った。

また、独立支援をするシステムをつくってきた。働く女性というのは、みずから働く時間を決めることができる。私は、家族との時間を大切にしながらゆっくり働いていくこと

ができるというシステムを構築したかった。子どもが小学校のとき、中学校のとき、高校のときで、子どもとのかかわり合いというのは変わってくるということを強く感じている。近くにいてほしいなと思うときにはいられる、そんなふうにするにはどうしたらいいのかなと思って新しいシステムを構築してきた。

起業というどどちらかというどばりばりと働いていくというイメージがどうも世の中にあると思うが、私は、女性の起業のあり方では、家族との時間を大切に、子どもとの時間を考えながら、でも、自分らしく、ほんとうにきらきらと輝く手段が私は起業じゃないかなというふうに思っている。

女性と男性の起業のあり方は違う。それは背景が違うから当たり前のこと。私自身も、一番大切な息子との時間というのを今後も大事にしていきたいなというふうに思っているし、女性が生き生きと働く社会とは、働いている女性の大切な家族がともに幸せになれるような、そんな社会ではないかなというふうに思っている。

【丹羽綾】

私は、以前は、建築関係の資材を調達する輸入建材の会社に勤めていた。出張が多い仕事であったため、小さい子がいると行けないため、私がやっていたポストを人に譲ることになり、もう自分でこれを続けていけないと思い、ほかのことをしようと思ってやめた。

その後、何か仕事として携わっていききたいという気持ちが強くて、資格をいろいろ見ていた。ちょうどそのときに整体院に通っていたら、そこは私たちの母親の世代の方たちが集まっている整体で、そこに私が赤ちゃんを連れていくと赤ちゃんをほかのお母さんたちに見ていていただいている間、私が腰を整体していただけるというようなサロンだった。そこで私はとても気持ちが救われ、私も整体をやりたいと思ったのがきっかけで、整体師の勉強を始め自宅でのサロンを開業することになった。

しかし、開業したからといって、お客様もなかなか来ないし、資格を取って自分でサロンをやり始めたら、それがもうスタートなんだと思っていたところ、何もスタートではなく、どうしたらお客さんが集まるんだろう、どうしたら私のことをみんなに知ってもらえるんだろうとすごく悩んだ時期もあった。そんな中、いろんな活動でママたちと触れ合うきっかけがあり、自営ワーママ☆クラブの前身になるキラキラママ☆プロジェクトの統括リーダーとして、メンバーの方の統括をさせていただくという立場で活動させていただいた。その中でたくさんのママたちと出会うきっかけをいただき、そこからいろんなつなが

りをいただいたということが今現在につながっている。

そういう活動をさせていただく中で、私が個人的に整体師として自営で働いているもので、そういう方たちが集まってくるというか、そういう方たちと出会うことが多くなって、少しステップした形で自営ワーママ☆クラブというのをこの前の4月に立ち上げた。月1回、何か講座だったり、交流会を企画したり、フェイスブックでみんなで交流して発言するというをやっている。

ママとして子どもと、家族と接していたいというのはすごく強い気持ちであるが、それだけではなくて、自分が自分であるために仕事というものをやっていきたいということを考えたママたちがたくさん集まっている。それで、みんなで寄り添って、ママとしても、働く一人としても一緒に活動しようという形で今活動させていただいている。

今はママたちだけで集まっているので、ほかの起業されている、社会で活躍されている皆様とのつながりができていけば、もっとママたちの活動が広がるのではないかなと思っている。

【小森美奈】

私は、企業内で、同じグループ内で働く女性を集めてワーキングマザーの集まりという取り組みをしている。

その活動の名前は、Mothers' (マザーズ)。同じグループ企業内で働く母親のための情報交換の場であればいいかなというふうに思っている。それと同時に、このMothers'に来れば、ちょっとほっとして自分らしくできるような、そんなオアシス的な存在になるといいなということを心がけながらやっている。

活動の目的は、2点。子育てや仕事などの両立をしていく上での情報共有をみんなで行う。それぞれ皆さんが体験していることを持ち寄って、みんなで情報共有をしていくというのが1点、それから、私たち民間企業で働くワーキングマザーの現状を外に対して広く発信していくということも活動の目的としてやっている。

具体的にやっている活動は4点。メンバーブログといい、会社のメンバーを募って、メンバー限定のブログということで、それぞれの子育て体験とか、日記とか、それから、こういうことを工夫しているよというようなものを公開し合うというような形でやっている。

2つ目は、持ち込みランチオフ会ということで、それぞれ皆さんで手弁当を持ち合って、集まる。みんなで顔と顔を合わせながら、それぞれどのような子育てをしているかと

いうのを情報交換する場になっている。

3つ目は、商品企画の中でメインターゲットが子育て層を中心とした商品企画などのときに、各職場から、社内モニターとかアンケートの協力依頼があり、子育てをしている母親として実情に合った商品をつくりたい、会社としてもよりよい商品をつくりたいという思いで協力もしている。

4つ目は、労働組合と連携をして、会社に子育て、仕事を両立する上での実情を発信していくということをしている。例えば、ある制度をつくるということにしても、やはりそれが使える制度、生きた制度でないと意味がないと思う。そういったことを私たちMothers'の声として会社側に発信していくというようなこともしている。

Mothers'ブログは、オリジナルのワーキングマザー支援サイトということで、できるだけローカルに、自社に合った、身の丈に合った子育ての情報交換をするというサイト。それから、働き続けていく上でのヒントであったり工夫。それから、ある意味覚悟であったり準備というのも伝える場。例えば、子どもが病気になったらどうするのか。病児保育ということがあるとか、これは名古屋市がやっている事業であるが、ファミリー・サポート事業なんかも私もよく活用させていただいているので、こうすればうまく乗り切れるんだよというようなものも発信したりしている。

それから、ワーキングマザーはいろんな部署に点在しているので、横のつながり、ロールモデル探しという場にもなっているかと思う。私もああいうふうになりたいとか、私もああいうふうになれば乗り切れるんだというような情報を織り込んでいる。

そして、一番こだわっているのが、“柔軟な、やわらかいネットワーク”。Mothers'に入ったからといって毎回来なさいということではなく、何か必要なときにここに来てもらえれば、みんなと助け合って頑張って生きていけるのよというような“やわらかいネットワーク”というのを意識している。

【桑原かおり】

私が年に4回発行している『メナージュケリー』という女性誌は2002年に創刊。最初のうちは読者のほとんどが専業主婦の方ばかりで、自宅でじっくり読んでいただくというような雑誌で少しアッパー層向けの女性に向けた雑誌になっている。最初のうちは専業主婦の方が多かったが、だんだん時を重ねていくごとに、働いている女性がとても多くなってきたと思う。当初は、働いている女性の方はあまり記事にはしてこなかったが、昨今の

名古屋の実情を考え、この10周年という機会を機に、専業主婦の方とキャリア女性の方を含めたアラフォーの女性に向けた雑誌というふうにコンセプトを少し方向転換し、大リニューアルをさせていただいた。

最初は、読者モデルの方も、なかなか雑誌に出ることをためらう方が多かったが、時を重ねると、だんだん、私も出たいなど自分で応募してくださる方も多くなってきて、それと比例するように、働いている女性が何か増えてきたなというのが私の個人的な実感。

弊社ではこのほかに『NG』という男性誌も制作しており3年ぐらい前にイクメンについて紹介する記事を掲載したことがあるが、正直、そのころ、東京の雑誌などではよくイクメンというような言葉が踊っていたが、『NG』のほうでイクメンの特集をしたが、残念ながらそんなに反響はなく、ちょっとまだ名古屋のほうはそういうのがついてきていないのかなというふうに思ったことがある。

名古屋の女性であるが、東京や大阪などと比べて、だいぶん横のつながりが強いと実感している。転勤などでこちらのほうに引っ越してこられる方もみえるが、やはり親子代々ずっと名古屋に住んでいたり、また、お母さんが近所に住んでいますという方がとても多いので、そういったことで横のつながりがとても強固な土地柄だと感じる。その中で、例えば、お友達のどなたかがお仕事を再開し始めた、子育てが一段落して、お仕事をもう一度やってみようというふうに思われる方だったり、ちょっとご自宅のリビングを使って何かサロンを開いてみようというようにお話をよく聞くと、そういったものが、やはり横のつながりが強いことによって、あの方はそういうふうな感じでお仕事を始められたわよという話になり、それが女性同士の刺激になって、じゃ、私も頑張ってみようかなというようになり、仕事をする方がちょっとずつ増えていると感じている。横のつながりが強いことによって、お仕事をされる女性に対しての理解がほかの地域よりも少しあるのではないかなというのが、編集というお仕事をされていて見えてくること。これから、名古屋の女性は、今までの保守的な感じから、少し外に目を向けていく女性が増えていくのではないかなと思っている。

【飛鷹正範】

私は岡崎市に住んでおり、家族構成が、妻1人、子ども3人。仕事は個人事業をやっており、コーチングとIT・ホームページ支援のask aboutという個人事業をやっている。

いろんな活動をしているが、三河子育てパパネットといういわゆるパパサークルを三河

のほうでやっている。七夕のときにバルーンアートをつくって、それで七夕飾りをつくらうという、ちょっと変わったイベントをしたりだとかお父さんたちも楽しんでやっている。私が企画する子育てイベントは、基本的にお父さん自身が楽しめるものを中心にしている。よくある子育てイベントだと、子ども向けのイベントというのはよくあるが、そうすると、お父さんはちょっと飽きちゃったりだとか物足りないという場合がある。そうではなく、お父さん自身が楽しんでいけば、もちろん子どもたちもそれに乗って楽しんでくれるので、そういったイベントを開催している。

次に、なごや子連れ狼の会という名古屋を中心に活動しているパパサークル。こちらのほうも、コンセプトはお父さんと子どもたちが休日に外に出ていくこと。そうするとお母さんに自由な時間がプレゼントできる。数時間かもしれないが、その時間で、例えば、デパートに行ったりだとか、美容院に行ったりだとか、お友達とお茶したりだとか、そういう時間をプレゼントしようというコンセプトもある。

また、NPO法人ファザーリング・ジャパンという活動にも参加しており、こちらは全国規模で父親支援という活動をしているNPOであるが、子育てというのは期間限定の一大プロジェクトだというコンセプトで、お父さんが子育て、家事、地域社会へ参加することの大切さとか楽しさとか、あと、ワーク・ライフ・バランスの啓発だとか、そういったことを行政さんから依頼を受けて講座を開いたり講演したりしている。

メンバーのほとんどが、子育て真っ最中のお父さんたちなので、自分たちの経験をベースにした講座をやっており、実践的、より現実味のあるような話ができるので、非常に好評をいただいている。

講座によっては、その地域でパパサークルをつくるというところまでの手伝いをする場合もある。

お父さんたちは結構遊び方も教えてほしいと言って来られる方もみえるので、遊び方も教える。ただ、遊び方だけでは、根本が変わったりだとか意識をしないと継続できないので、そういったところでお話も含めながらやっている。

また、自分は男女共同参画のほうにもかかわっており、岡崎市男女共同参画推進サポーター「すいか隊」という活動もしている。すてきな生き方考えようという、す、い、かと頭文字をとってすいか隊と言っている。年に2回、岡崎市で冊子が発行されており、その編集だとか出前講座などをやっている。

子育て中のお母さんが働きに行こうと思うと、子どもをどうするかが非常に大きいと思

う。働いていないと保育所に預けられない、保育所に入れるためには働いていないといけないという、すごく難しい状況がある。保育所が今足りているのか足りていないのかとか、いろんな問題が出てきているが、地域差も結構あるみたいであるし、同じ市の中でも、住宅地とそうでないところでは全然違うようなものもあり、保育所を増やす際の規制緩和があったりして、いろんな条件が撤廃されて参入しやすくなっているみたいであるが、ただ、いろんな制約があったりだとか条件があったりして、なかなかフェアに闘えないような状況に今あるというふうに聞いている。

三河は、特に私が感じるのは、都市部の性質と地方の性質が入りまざっているような感じがして、3世代同居の家庭とか、親族が近隣で過ごしている世帯もあるが、一方で、大手自動車関連企業だと転勤で転出入が激しく、行政に求めるサービスが非常に多様化をしている。そういう意味でも、いろんなサービス向上のためにも保育園も増えていくような形になっていったらいいかと思っている。

【犬飼将清】

弥富市で建設会社、弥富建設をやっている。建設会社であるので、私どもの会社は非常に男性の比率が高いという現状であるが、男性、女性を問わず少しでも働きやすい環境づくりができればいいなと思っている。

私は、働く人の原点は家族にあると思っている。もちろん、働くためには意欲というのは当然必要なことだと思っているが、会社内で環境を幾ら整えても、家族の幸せというものにかなうものはないのではないかと思っている。そんな中で、私どもの会社で直近で色々なことをしてきた事例を少しだけ紹介させていただく。

この5月に男性社員に待望の第1子が誕生したが、出産前から積極的に定期的にマタニティー教室に通わせ、予定日近くにはできるだけ病院の近くの現場へ配属をした。また、産後1週間の休暇をとったり、残業をなくしたりということで、今は早く家のほうに帰って、すごく育児を楽しんでいるという事例がある。

また、保育園の子がいるが、保育園の子が卒園して小学校に入ると、低学年だと子どもが早く帰ってきたり、夏休みなんかの長期休暇のときに、子どもの受け皿がないという現状があったため、会社のほうで、子どもの受け入れ態勢をつくり、子どもがいつ来ても良い形をつくったりしている。

また、小学校低学年、高学年の子どもがいるが、この子たちについては、社員の方も学

校の成績を親として結構心配しているので、寺子屋のイメージで、保育士の資格を持った人だとか教員免許を持った人に来ていただき、少し宿題を教えたりしている。

あと、ホームステイの受け入れもやっており、外国人の人がたくさん来て、小さなころからできるだけ外国人を怖がらずに英語を学んでいけるというようなこともやっている。

中でも、教育とはちょっと違うが、うちの社員で、子どもが脳腫瘍という病気になり、どうしようということがあったが、みんなでいろんなつてを探したら、「神の手」と称されている著名なドクターからメールが来て、無事手術をすることができ、何とか完治したという状況があり、みんなでいろんなことをやると、ほんとうにすごい力になるんだなど実感をしている。

先ほど、会社の働く人の原点は家族であるという話をしたが、まず企業の原点というのは働く人の力だと思っている。働く人の原点は家族であるということで、家族のために何か会社でできることをしてあげることによって、働く人たちがよりよく働ける。社員の生活を大きく守ることによって、就業規則や法律、そういうものだけでは満たされない、そんな事務的ではないものを何とかカバーして、ほんとうの企業の目的、お客様のためにどういうことができるだろうかということを考える人たちを育てていければなと思っており、そういう社員をそろえることによって、社会貢献だったり、行く行くは人のためになるようなことができればほんとうにいいことではないかなと思っている。

【横井暢彦】

私の会社は、子どもの笑顔があふれるまちづくりということで、モノづくり、人づくり、まちづくりというところで会社の理念に挙げさせていただいている。

人づくりというのはやっぱり子育てと教育。子育てと教育というのは、そうしたところで社会全体のことでも最も重要な視点じゃないかといつも考えている。特によく学校で言われるような知育、体育、徳育とか、特に知識的なところで知識偏重ではなくて、今スポーツも大分認められてきたが、徳育の部分が欠けています。こういったことというのはなかなか評点にすることができないので、ただ、社会に出るとやっぱりものすごく大事なところ。こういった徳育もしっかりと伸ばしてあげなくてはいけないと思う。

教育というと、やっぱりすぐ学校と言うが、学校以外のみんなが社会全体で、みんなで教育、育てていかなくちやいけないと感じている。その結果、最終的には、生涯を通じて学ぶということをしつかりと教えるということ。それと、遊ぶというゆとり、楽しみもな

くてはいけない。そして、最終的には働くことが大切なんだと、そんな思いで進めていた
だきたいと思う。

会社の紹介であるが、万博の愛知県会場とか、早稲田大学とか、豊田の美里交流館のレ
リーフとか、いろんな住宅とかの、手づくりのタイルをつくらせていただいているメーカ
ー。手づくりのタイルというのは、粘土を扱う関係で、非常にほこりっぽい、汚い、仕事
も、ほんとうにだれにも負けないぐらいしんどい仕事。ただ、みんなが嫌々仕事をやって
いるかといったら、全然そうではなくて、みんなほんとうに楽しそうに仕事をしてくれ
ている。それはなぜかというと、やっぱり仕事、働くことを、人のための働くんだという
ことをしっかりとわかっているから。あと、自分たちがつくったものがこうした形になっ
て、しっかり社会に役立っていると、そういったところで一人ひとりがみんな誇りを持っ
て働いている。

愛知県の教育というのは、自分たちのまちで育ち、学び、そして働くと、こういうサイ
クルがしっかりとできているので人材にも教育にも投資ができる。それがぐるぐるちゃん
としっかりと回っているからこそ、そういったものが愛知県を支えているんじゃないかと思
う。愛知県のモノづくりは日本一、世界一のまちではないかと、そんなふうにもいつも考え
ている。

うちの会社は、従業員といつも3つの約束事というのをさせていただいている。子育て
しながら働くことの職場環境を実現しますと、実際にそういうことでやっている。

1つが、自由な出勤。仕事に出てくる時間、仕事に出る日にちだとか、これは会社が決
めるのではなくて、従業員が個人個人、自分たちで決める。何時に出てきてもいいし、何
時に帰ってもいいし、いつ出勤してもいいですよと、そういう自由な出勤で子育てとのバ
ランスを保っている。

2つめは完全能率給。やったらやった分だけちゃんとしっかりとそれを評価しましよ
うと。うちの場合は、1日分の仕事を半日でやったら、ちゃんと1日分の給料を払いますよ
と。女性の方は、ほんとうに時間を使うのがうまい。そういう条件さえ与えてあげれば、
これをやれ、あれをやれと指示命令ではなくて、自分たちで考えて、すごく効率よく仕事
をこなしていく。すごく短い時間で効率よくやることによってバランスがまたとれてくる
のではないかと。

3つめは子連れ出勤。子どもたちを自由に連れてきてくださいと。これは会社の条件だ
けではなくて、子どもたちを連れてくることによって、子どもたちに自分たちの親が働い

ている姿を見せるという、これが教育的なところですごく大切なこと。

このように、この3つの約束事をして進めている。こんなことが、どこでもできる、だれでもできるんじゃないのかなというところを、まずは経営者の意識改革が大事じゃないかなと思う。

このようなことで、2008年にCSRグランプリというのをいただいた。CSRは今かなり名前も皆さんに浸透してきたが、特に女性の視点でのCSRというので進めていっていただきたいなど、そんなふうに考えている。CSRはいろいろ難しいこともあるかもしれないが、簡単に3つの視点で紹介させていただきたい。

まず1つは、経済性ということ。企業はよく営利目的だと言われるが、企業というのはもちろん利益を出すことは大事であるが、会社は社会の一員であって、収益というのは社会からの預かり物であると。その預かり物を経営者というのは社員と一緒にどう社会に還元していくかということが一番に考えなくてはいけない、そんなふうに思っている。特に納税の義務というのがあるが、これは一番大切なボランティアと僕はみんなに教えている。しっかりと働いて税金を納めることによって、それが全部市、県、それぞれの町の中で集められて、それをきっちりと再分配することによって進めていく。働くことはボランティアだと、そんなふうにも教えている。

もう一つは社会性。ここで大事なのは、社会にいろんな、見渡すと課題がたくさんある。今日の男女共同参画もそうであるが、そうした社会の課題を自分の会社の中に取り組みで解決するものがほんとうは会社としてのあるべき姿じゃないのかなと、そんなふうに考えている。

次に、人間性。これは、言うまでもなく人を育てていく。最終的には、人間として豊かな心をはぐくみ、幸せな社会をつくっていきたい。そんなところをこれからは女性の視点でいろいろ考えていただきたいなど、そんなふうに思っている。

豊かな心、人間性をつくるには、賢い人間を育てなくちゃいけない。賢い人間というのは、これは、僕は、一言で言うと感性ではないかなと。感性というのはいろんな感動体験で生まれるが、特に日本人の感性というのは、いろいろ四季の中で、日本の自然の中で、きれいな自然じゃなくて、厳しい自然の中で生まれ、培ってきたものがあると思う。春、夏、秋、冬の四季によって、食べ物がなくなってしまうとか、いろんな厳しい自然の中に、日本というのは島国の中でずっと培ってきた。そういったところのすばらしい感性を持って育っている。そういうDNAが皆さんの中で、一人一人みんな備わっている。そういう

のをいかに引き出すかというところが教育ではないかなと、そんなふうに考えている。

そういったところで、キャリア教育というところちょっと難しいですが、生き方教育とか、特に子ども会なんかも、地域の中で既存のそういう組織だとか団体とかがたくさんあって、新しいことをやると何かすばらしいことが生まれるような気がするが、新しいことを考えることはもちろん大事であるが、よくよく地域をしっかりと眺めてみると、いろんな地域の中にいろんな財産が、人もひっくるめて埋まっている。そういったところを進めていくことによって生きる楽しみ、生きる力、そして、夢、希望を持って、最終的には自分たちの自己実現につながるんじゃないかなと、そんなふうに考えている。

(パワーポイントの写真を示して)「夢たまご」の写真が出てきたがこれは、すべての人たちが、子どもも大人もひっくるめて、すべての人たちに夢を持って生きてほしい、そんな思いで自分の会社も思いもいろいろあって進めていく。ぜひ皆さん、一人一人、夢を実現していただきたい。夢を持ってほしいなと、そんな思いで持ってきました。

【大村知事】 ありがとうございます。

それぞれ8名の方からご意見をいただきました。どなたからでも結構ですので、さらに言い足りないということがあれば、何でも結構ですので、ご発言をどうぞ。では、大津さん、どうですか。

【大津たまみ】

シングルマザーが働く環境の中で、愛知県としての取り組みはどのようになっているのだろうか。

【大村知事】

まさに大津さんが受けられた、創業プラザなどでの自立の支援など、これは国全体がやっていますけど、県も、よそと比べてはいけませんが、積極的にやっているほうだというふうに私は思っています。

【横井暢彦】

女性はずなりの場をつくるのがものすごくうまいなと感心している。女性の視点というのはやっぱりすごく大事。男性と比べるとわりと就業意識にしてみてもかなり強いと

思う。ただ、残念なのが、まだまだ社会の中でそういう仕組みがきっちりと確立できていないので、そういうところを一つひとつ潰していけば、もっともっと女性が働く場所というのがこれから増えてくるんじゃないかと感じた。

【大村知事】 ありがとうございました。

いかがですか。丹羽さん、どうぞ。

【丹羽綾】

例えばサロンを自宅でやられているとか、講師業をしていらっしゃる方とかたくさんいらっしゃると思うが、私の周りの自営のママたちは、皆さんほんとうに子育て真っただ中。私自身も、本日の会に来させていただくのに、子どもをどうしようかと思ったときに、このウィルあいちに託児がありますよと言っていたのがすごくうれしかった。

やっぱり小さい子がいると、どこかへ出かけるのも、子どもを連れていくのか、だれかをお願いして預けるのか、もしくはお金を払って託児所に預けるのか。簡単にお金を払って預けてしまえばいいけれど、なかなかちょっとそれを罪悪感に思ってしまうママも多くて、仕事も自分の好きなことの1つだと考えるママが多いので、自分の好きなことをやるのに子どもを犠牲にしているんじゃないかと思うことが大きい。なので、例えば、ウインクあいちとかも、子ども連れのママの日みたいなのをつくっていただいたりすると、起業したいと思っているママが行きやすかったり、創業準備の支援の内容を例えばもう少し郊外で、イベント的にでも構わないのでやっていただくとか、子連れでも行ける場所。例えば、話をじっくり聞くために少し子どもを見ていただけるスペースがあるとか、キッズスペースがあるとかというものがあると、とても行きやすい。

やっぱり街中まで行くとなると、ママたちはちょっと足が遠のいてしまう。なかなか街中を車を運転するのも怖いという方もすごく多いので、郊外にそういうものを持ってきていただくというのはすごくうれしい。そういう形で、ほんとうの社会とつながる場所というのを、子育てで頑張っている、でも、仕事もやっていきたいというママたちに与えていただけるような機会をもっともっと増やしていただけるとうれしい。

【大村知事】 ありがとうございました。どうぞ、飛鷹さん。

【飛鷹正範】

先ほど、保育園に入れるのに、働いていないと入れられないとかいろいろあるという話があったが、私も、一時期、会社員をやめてから自営を始めるまでの間に、自営をするという決意がまだなかった時期に会社の就職試験を幾つか受けていたが、子どもたちを預けるところがなくて、子どもを連れて就職試験に行ったことがある。今日みえている皆さんも子どもたちを保育園に入れるまでの間とかに、託児を利用する際のいろんな経験があるのではないかなと思うので、何かあったら聞きたいと思う。

【小森美奈】

託児ということに対して、今も皆さんがおっしゃっていたように、少しやっぱり引け目とか、特に病児保育なんかは、病気の子どもの預けて仕事に来ているのとかってよく言われることもあったが、私の理解のある配偶者とかは、「託児することによって、結局対価を払っていて経済貢献しているんだから、すごくいいことではないか、ほかの人が困っていれば、自分がもしかして年老いたときに見てあげられるかもしれない。こういう社会循環が一番大事なんじゃないかな」という言葉にちょっと救われたところがあった。なので、私もいろいろサポートファミリーとかを利用させてもらったり、もちろん実家の親とか近所の人に預けて見てもらうこともあるが、やはりみんながみんなのために助け合っていくような、こういった仕組みはもう少しよくなるといいのではないかなと思う。

【大村知事】 子どもを預けるという意味ですね。それは確かに大丈夫だと思いますね。別に引け目を感じないように社会全体の意識を変えていけば。むしろ子どもにとってもハッピーだし、それは親御さんにとってもハッピーだしということ。もっと社会全体を意識していくということが大事かなという感じだと思いますね。

ほかにどうですか。どんどん言っていただければと思います。

林さん、いかがですか。

【林美保子】

子育てと仕事の両立について、皆さんの話を聞いていたら、考え方を変えて、仕事の仕方を変えれば、両方の幸せをつかむことができた方もいらっしゃるし、きちんと企業に

勤められてそういう活動をしながら子育てをされていらっしゃる方もいるし、このように男性も積極的に育児に携わっていらっしゃる方がいるんだなということを初めて、正直言って知り非常に驚いた。最近、会社で、20代、30前後の男性たちは結婚相手には働いている女性を選びたいと言う。それは、やはりバブルが終わって非常に景気が悪いという中で、自分の収入だけで奥さんを食べさせていくということが非常に厳しいというふうに、それで、いい生活をしたいという気持ちもあって、やはり奥さんにも働いてほしい。そのかわり僕たち何でも、家事もやりますし、何でもやるよというふうに言う男性が非常に増えている。それはなかなかおもしろい傾向だなというのを感じている。男性がこれからどんどん変わっていくのかなというふうに思うので、女性が欲張りになれる時代がやってくるのかなというような気がしている。

【大村知事】 おっしゃるとおりだと思いますね。そうなっていかないとやっぱり元気が出てこないですねというふうに思います、私も。

桑原さん、いかがですか。

【桑原かおり】

犬飼さんや横井さんの会社というのはいつからそういった取り組みをされているのか、時代の流れでやられているのか、それとも、その前からそういったことをされているのかを伺いたい。

【大村知事】 犬飼さん、どうぞ。

【犬飼将清】

うちの会社の場合は、自分の子どもの悩みというか、ほんとうに子育てをしながら仕事をやりながらという状況だったので、自然にそのような形になった。上の子は今高校2年生ですので、皆さんの言われることはほんとうによくわかるし、皆さんが苦勞されているのもほんとうによくわかる。うちの子たちにも嫌な思い、苦勞する思いというのはやっぱりさせたくないなというふうに思い、いろんな話をしていた。

もともと従業員同士の話というのはすごく大事なことではないかなというふうに思っていて、人が言うと言くと信じるという字になる。要は、会社の中で信頼関係を築き上げる

ために少しでもコミュニケーションをとろうということ、そして、その先にはお客さんから信頼される者になろうということで、信頼される者と書いて儲けるという字になる。そんな感じで、何しろコミュニケーション、相手のことを思ってというポリシーで働こうじゃないかということを考えている。従業員のためを思うということもそういうところから、子どものことがみんなの話の中に出てくることによって、そういうことは必要なんじゃないかなということになり、さまざまな取り組みをしている。

【大村知事】 横井さんどうぞ。

【横井暢彦】

私は、もともと、会社をやる前から、いろんな思いが子育て、教育に対してあり、やっぱり最終的には自分で会社を起業しないと、自分の思っている思いが実現できないなと思って会社をつくったので、会社をつくったときに、一番最初から先ほどの仕組みをつくった。

会社は別に8時からじゃなくてもいいんじゃないかとか、給料にしても、何にしても、自分が好きなように、自分が思ったとおりの会社をつくらうと。なので、そんな大きな規模でなくても、自分のできる範囲内の仕事だったら、それで実現できるんじゃないかなと、そんな思いで会社をつくった。

その中でいろいろ思ったのが、とにかく会社って何か就業規則でがんじがらめになって、営利目的で、それももちろん大事なところであるが、いろんな価値観があるんじゃないかと。特に、子育ての時間は絶対に返ってこない、そういう時間も絶対大事なんだと思う。子ども会だったり、いろんな地域のことなども、一緒になってみんなが成長していかなくてはいけない、そういう視点が全く欠けているなと思ったので自分がそういうのを実現したかった。それでそういう仕組みをつくって今に至っている。

【大村知事】 桑原さん、いかがですか。今のお二人のお話を聞いて。

【桑原かおり】 会社を変わるなら、1日体験とか、ちょっとどんな会社なのか行ってみたいなど。(笑)

【大村知事】 一回ぜひ体験していただいて、その雑誌に書いてください。紹介してもらったらいいんじゃないかと思います。

ちょっと私からも申し上げると、男女共同参画社会については、私は知事になる前もずっと国会議員で厚生労働関係をやって、厚生労働副大臣もやったので、この話はずっと私自身に取り組んできたものの1つだったのですが、いろんな角度から少子化対策とか子育て支援だとか、あと、男女共同参画、いろんな企業の中での男女雇用機会均等とか、ずっとそんなのでやってきたのでいろんな思いがあるんですが、やっぱり、ただ、着実に変わってきていると思っているんですね。着実に社会全体が変わって、特に20代、30代の人たちというのは、男女雇用機会均等法が1986年、昭和61年に完全施行になってから、大手企業の中では全然変わっていますよね、意識として。制度自体もそうだし、意識も変わっている。そういう中で、やっぱり男女が共同で一緒に子育てしなきゃいけない、いろんな地域活動に参加しなきゃいけないという意識はずっと来ていると思うんですが、まだまだ足りないということなのでこういうテーマになると思うんですけど、それについて、さらに何か、こういうことをもっと、役所とか県とか市とか行政だけではなくて、会社もそうだし、社会もこうあるべきだとか、こうしたらどうかとか、そういうご意見があれば何でも結構ですが、いかがでございましょう。

大津さん。

【大津たまみ】

子育てしている女性が働くと考えたときに、一番のネックって何かとふと思ったが、子どもが病気のときに預かってもらえる先というのが、ほんとうに今のこの体制だと少ないというふうに思う。病児の子どもだと保育園で預かってもらえない。普通で預けられるところに預かってもらえないという、どうしても休むという選択しかできないが、そうするとどんどん責任ある仕事から外されていってしまうということもあると思う。これをもう少し整備できないか。子どもは結構病気をするので病気の子どもを預かるということを観点に考えたような、そんな制度があったら、もっと活躍する女性がもっと増えていくのではないかなというふうに思う。

【丹羽綾】

病児保育の件であるが、例えば、主人の母にお願いとってお願いして預かってもらっ

たりとかのパターンが多いと思うが、そういうパターンで預かってもらえない人が多分困っていると思う。逆に、預かってもいいよというおじいちゃん、おばあちゃんがいると思うので、そういう方たちと困っているママたちをつなげる何かがあったら、病院に頼らず、ちょっと地域のおじいちゃん、おばあちゃんに助けを求められるというところも1ついいのかなと思う。

【大村知事】 病児保育の話というのは確かに大事なので、そういったところがやれるような医療機関とネットワークして、引き受けてくれるところを徐々に増やそうとやって今やっています。そういう声があるのは事実なので。だけど、まだまだ正直言って十分ではないというのはおっしゃるとおりなので、そこを広げていくというのは大事だと思います。

どうぞ、横井さん。

【横井暢彦】

確かにそういった、病児保育に預けるということも必要だと思うが、もっと先に考えなくてはいけないのは、やはり子どもの立場に立って、子どもがほんとうに病気になったときに近くにお母さんにいてほしいと思ったら、なるべくやっぱりつき添ってあげてほしいと。それはやっぱり会社のほうが考え方を変えていかないと、今日は病気に子どもがなりましたといったら、じゃ、どうぞ家でちゃんと子どもを見ていてくださいと。その時間の仕事が、ちゃんと次に出てきたときに挽回できれば、それでどちらもできる。それを無理して、子どもを病院に行って、寝かしつけて仕事に来てしまうと、子どもにとってはちょっとかわいそうかなと思う。そういう社会の仕組みを企業側がやっぱり変えていかないと、なかなか難しいんじゃないかなと思う。

【丹羽綾】

子どもを健康に育てることが大切だと思う。私は、整体師という立場から、子どもの健康ということにも少し力を入れているが、子どもの免疫力を高めるということだったり、あとは、ほんとうに小さいときから強い子どもをつくっていくことをやっていきたいなと思っている。育て方1つで少し変わる。私は3人育ててみて、一番上より2番目、2番目より3番目がやっぱり強い。それはやっぱり育て方が、だんだんうまくなっ

てきたと思うところがあるので、そういった知識をみんなでシェアしたり、あとはそういった取り組みもつくっていただけるといいのかなと思う。

【大村知事】 なるほど。それが一番大事なところでしたか。
ほかにいかがでしょうか。飛鷹さんどうぞ。

【飛鷹正範】

女性の働き方とか、それから、価値観、価値観というのは女性に限らず男性もだが、すごく多様化していて、行政であったりだとか保育所、託児に求められるものがものすごく広い。働き方によっては、もしかしたら24時間保育が欲しいところがあったりだとか、病児保育もそうだし、それから、習いごとみたいなことも、保育園、幼稚園でもっとやってほしいとか。そうすると、意欲を持って新規参入するような保育所を応援するような政策であったりだとか、僕たち自身もそれを応援するような、そういうような社会になっていけばいいかなというふうに思う。

聞いた話だと、今、株式会社とかNPOも保育所に参入できるという形になってきたが、いろいろ助成金だとか補助金だとか、その辺でなかなかフェアじゃないような状況もあるという話も聞いたので、その辺を改善であったりだとか応援できる仕組み、社会になったらどうかと思う。

【大村知事】 さらにいかがでございましょう。最後に一言言っておきたいという方、どうぞ。

【横井暢彦】

ワーク・ライフ・バランスなどについて、大企業はいろいろやっているが、実際の仕組みとしてはあっても、なかなか実行されていない。もっと、例えば、肢体不自由でも様々な障がいであっても、いろいろお母さんたちで悩んでいる方がたくさんみえる。そうした方、一番助けを求めているところになかなかそういったところが手が届かないようなところがあって、元気に生きているところはまだ良いのだが、そういうところの視点というのは一番大切にしながら進めていかないとなかなかバランスもとれないのではないかなと思う。

【大村知事】 おっしゃるとおりです。

犬飼さんどうぞ。

【犬飼将清】

病児保育についてであるが、もともと3年前にファミリー・フレンドリー企業の知事表彰を受けたときの話は、ちょうど4年前ぐらいにインフルエンザが流行して、親御さんたちが子どもを預けるために休まなきゃいけないというような状況になったので、じゃ、会社で保育士さんを雇って会社に来たらどうでしょうということからスタートした。そういうのもあって、今、横井さんが言われるような制度づくりというか、会社がほんとうに変わっていかないといけない。その中で、大きい会社は形だけかもしれないですけど、小さな会社はほんとうにフットワークよく動ける会社になれると思うので、そういう会社が増えたらいいなというふうに思う。

【大村知事】 飛鷹さんどうぞ。

【飛鷹正範】

男女共同参画というのは非常に幅の広いテーマではあるが、僕が男女共同参画って何ですかと聞かれるといつも言うんですが、多様な考え方とか生き方とか、それを認め合う社会になってほしい。もし自分と考え方が違ったとしても、それは違うよではなくて、その人たちの生き方、考え方を応援してあげられるような、そういう社会になったら、これは男女共同参画社会というのが実現できたのではないかなというふうに思う。これは、子育てであったり、育児であったり、そういった面も含めてほかの人を応援してあげられる社会にしたいと思う。

【大村知事】 桑原さんどうぞ。

【桑原かおり】

私は、雑誌編集の立場から、企業に勤めていらっしゃる方や起業し始めた女性をこれからもいろいろとご紹介していくかと思うが、こういうきらきら輝いている、働いて頑張っている方がいっぱい過ぎて、載せるのが大変だというような愛知県になってい

けばいいなと思った。

【大村知事】 ありがとうございました。小森さんどうぞ。

【小森美奈】

最近常々感じていることと、今日また皆さんのお話を伺って改めて痛感したことがあるが、やはり、「働きやすさ」と「働きがい」と両方ないといけないんだろうなと思う。

「働きやすさ」というのは、制度ができてきたり、行政の皆さんに働きかけをしたり、ワークバランスとか、今、育児だけではなく、今後、介護も大きな問題になってくるので、こういった制度を整えるということと、やっぱり働いている、男性も女性もそうであるが、「働きがい」をいかに持てるか。誇りを持って働けること。私は、確かに子育てもやっているけど、この仕事も誇りを持ってやっている、責任を持ってやっている。子どものために、家族のために頑張るといような、そういった気持ち、それと、また、成果もちゃんと出していくということが非常に大事だと思う。

やっぱり「働きがい」を感じるには、期待をいただくということと、機会、チャンスを持たせていただくということが非常にキーになってくると思っていて、知事が、例えば働く女性とか、愛知県の男性とかに何か“メッセージ”というか、あと、私たち女性には何か喝を入れてほしいなと思っている。喝というのは、期待の裏返しだと思うので、そういったことをいろんなところで“メッセージ”としていただけると、非常に励みになるのかと思う。

【大村知事】 メッセージは大事ですね。ちょっといろいろ考えます。

丹羽さん、どうぞ。

【丹羽綾】

自営で働くママたちは、子どもの時間だったり、子育てに使う時間だったりボリュームだったり調整しやすいということで自営を選ばれる方が多い。幼稚園に上がるのをきっかけに起業される方が多くて、小学校に上がって、また少し縮小されたり、大きく増やしたりというふうで、子どもの年齢に合わせて段階を踏まれて仕事を広げられていく方がいるが、その方たちがほんとうに社会にもっと入っていきたい、本格的に仕事がしていきたい

いというときに、何かバックアップしていただけるようなことができたらうれしいなと思う。

【大村知事】 ありがとうございました。

では、大津さん、どうぞ。

【大津たまみ】

起業家として自立した女性をどんどんこれからも増やしていくというところで、ほんとうに女性らしく家族のことを考えながら進んでいける、そんな状態になれたらいいなというふうに思う。先ほど横井さんのお話の企業もそうであるし、行政もそうだし、働いている女性自身も、飛鷹さんが言っていたパパも、みんな家族全員そろって、力を合わせて、女性が社会に出ていくということをサポートできるような状態づくりというのが必要だなと思ったし、大村知事からメッセージも欲しいですし、あとは、今日私たちはそれぞれの参加者の方の活動の話聞くことができたのだが、こういう活動をしているよという情報発信をどんどんこれからもしてってもらえたらいいなというふうに思う。

【大村知事】 ありがとうございました。林さんどうぞ。

【林美保子】

先ほど、働きがいという話が出たが、やはりお金のために働くのではなくて、その仕事が好きだから働くということができれば、女性はより輝くと思うし、人生も豊かなものになるんだろうと思う。そのためには、やはり働きやすい環境をつくってもらおうという、男性にそういったお願いをするということは、女性も努力が必要なんだなというふうにしみじみ思った。今日参加の皆さんはすごく努力されていて、時間を上手に使って仕事をされているということで、例えば出産で休んでも、戻ってきてほしいと会社に思っていただけの人材になるということが女性にも必要であるし、そういうことを思っていたできるように私も努力していかなければいけないなということを改めて感じた。

【大村知事】 ありがとうございました。

話は尽きませんが、最後に、私も感じたことだけ申し上げます。

さっき申しあげましたように、私も国会議員のときからずっといろいろ、男女共同参画とか、雇用機会均等だとか、子育て、少子化とか、いろんな課題に取り組んできたんですが、1つだけおもしろいエピソードを言いますと、そのとき、よくいろんな学者の先生方と話をするんですけど、慶應大学の清家先生っていまして、塾長をまだやっているのかな、労働経済の大家なんですけど、経済学部で自分のゼミで学生に聞いてみたと。君たちは、大学を卒業して、すぐ結婚したいか、もしくは20代で結婚したいか、そうでもないかと聞いてみたら、男子学生は全員早く結婚したいと。女子学生は、20代で結婚したいという人はゼロだったと。なかなかこれから大変ですよ、大村さんとかってよく言われましたけどね。

でも、そう思いませんか、何とはなしに。やっぱり女子学生は慶應まで来て、一生懸命自分としてはキャリアを積んできて、どこかいろいろなところで働けるところがあると。そうすると、就職してすぐに男なんかにかしづくのは嫌だと、何を言っておるんだと。自分をもっともっとキャリアを積んで、自分のやりたいことをやるんだということなんだそうです。

だから、そういう中で少子化問題を考えていくというのは容易ではないなと。だから、企業も、社会も、政策も含めて、よっぽど思い切って変えていかないと、よっぽど踏み込んで、突っ込んでいかないと、とてもじゃないけど、むしろ企業とか働く場所では、雇用機会均等というのは、役所はもちろんですが、官公庁、学校の先生方の世界、それからあと、公務員の世界、それから、大手企業さんは大体、中堅企業まで含めてもうそうなっている。世の中の社会もそうなっている。しかし、そのときに子ども、子育てをどうするんだという話になると、それは今までどおり女性だと言ったら、そうするとみんな産まないですよ。だから、そこをやっぱり社会全体で、国とか県とか市だけがやれとかいう話でも、これもいけないので、企業も含めてどうやってみんな考えていく、地域で、社会で、企業も含めて全部どうやって考えていくかというのは、これもまた、まだまだまだ、日本はほかの、アメリカ、ヨーロッパ、それからいろんな国と比べても、まだまだ踏み込んでいかなきゃいけない課題じゃないかなというふうに私自身思っていますので。

今日は皆さんに貴重な時間をいただいて、貴重なご意見をいただきました。いただいたご意見は一回まとめさせていただいて、さっき言われました、何らかの形でどこかでメッセージという形で出せばいいかなと思いますので、またよろしく願いいたします。

ほんとうに今日はありがとうございました。

